



東日本大震災復興ボランティア3Dプロジェクト

『3Dproject』体験談～3Dプロジェクトに見る自らの描き～

高校三年 男子

二〇一四年五月九日。午後八時頃に、とうに日の沈んだ暗闇の中を進んだ。外灯のないはずの道は薄明かりが奇妙にギラついて見えた。千葉県木更津市から宮城県山元町へ。僕にとって三度目のボランティアとなった。

過去に二度、いずれも「3Dプロジェクト(以下『3D』)」と名付けられた東日本大震災復興支援に参加した。「できることをできる人ができるだけする」をテーマとするこのボランティア団体は、三度目にしていよいよ僕の中に確固たる重みを持ちはじめた。

ボランティア経験者が「お留守番」という事態は想定していなかった。ヨハネ研究の森を代表するという意識が自然と働いた。堂々とした振る舞いに、中学生のサポートをしなくては……。決意というよりも「気負い」と呼ぶべき心境だった。

結果的に、その状況は上手く働いた。利己の意識が消えたことによって、よく首が動いたし声も出た。大人との関わりも引け目に感じるどころか根拠のない自信に溢れていた。ボランティア中の僕の動きには、このような背景があった。

現地での活動は、主に二つに分けられる。津波の影響で土に混じった瓦礫を綺麗に仕分けた土地には桑やかぼちゃが植えられていた。すくすくと育つよう、僕たちは雑草を刈り取った。もう一つは被災者との交流会

ということ、町の区民館で歌を歌った。他方、気付けばごみを拾ったり、山元町の現状を見た。

その中を、大人に混じって学生がいる。はっきり言って体力以外に取り得はない。「できること」は、大人の行動の意図を読んで状況をスムーズに動かしていくことがほとんどだった。畑作業では巻き上がる砂をかき分けて誰も作業していない場所へ走り、交流会では積み重なった椅子や机を率先して運んで会場を作った。邪魔にならないレベルが僕の「できること」だった。

と言っても、邪魔でないにも意味合いが幾つかある。影が薄く、いてもいなくても同じということではない。確かに僕も貢献したと思える活動が出来たのである。例えば掃除。山元町に着いてすぐのトイレと周辺の

清掃活動。それと被災者との交流会の会場設営。手を尽くせる限り、床から扉の枠など隅から隅まで工夫した。僕が自室や研究室を掃除するのとまるきり同じ感覚で取り組むことが出来た。「こうすればもっと心地よく思ってもらえる」という思いが、交流会という場を作っていたと思う。

また、桑畑の雑草抜きも移動中や食事の際の会話にも、自分あるいは自分たちがその場を作っていると感じた瞬間があった。

以前のボランティアと比較してみると、がむしゃらに取り組むだけではなくなったように思う。できないからこそ、自分に出来るかもしれないことに何でも飛びついてきたこれまで。すべきことと誰かに任せられることを無意識に判別し行動できたこととは対照的で

ある。後輩や大人たちを気遣える余裕や、山元町を歩いて直に見るなどの僕なりの行動は、三度目にして初めて感じることできた地点だった。

僕はボランティアと「非日常」と表現している。環境の変化から、考えさせられることの量まで、ヨハネ研究の森での生活とは一線を画しているのである。そうした位置づけにあったからこそ、ボランティアの経験が僕の生き方にまで関わってきた。しかし、先程述べた経験はむしろ逆。日々の生活が「非日常」に活きてきたのである。出来ないことが多い中で出来たことというのは、僕が積み上げてきたこと以外には考えられない。

ヨハネ研究の森での二年間の学びに加えて、『3D』との出会いが僕に血肉とな

っている。変わりたいと思っただきかけだった。『3D』とは何だろうか。帰り道、バスの中で主催者である塩澤好久さんとお話する機会に恵まれた。急な申し出に嫌な顔一つしないで答えて下さった。

おそらく『3D』とは、塩澤さんがずっと実践してきたことに相違ない。自らの器を定めず、誰かの笑顔や幸せのために何が出来たのか、骨身を惜しまず動き続けてきたことが伺えた。それがボランティアなどの企画(事業)として表れているのだろう。

納得した。普段は上司・部下に当たる人たちは、同じ作業を如何にも中の良さそうに行う。その輪に入ってきた人は「自分にできることを」と自主的に取り組みだす。塩澤さんの精神が広がっているのだと気付い

たとき、肌が粟立った。
二〇一四年五月十一日。
午後九時半ごろに学校に戻った。数えるほどしかない
外灯の映す矢那の森のひんやりとした空気は、なぜか山元町で嗅いだ静けさに似ていた。
了

